

## 新『鈴が池物語』

白井啓治

石岡小学校の西、俗称城中山に鈴が池と呼ばれる池ございまして、その昔、この池に棲む魚はみな片目であったという伝説が残されております。

時は一五九〇年、天正一八年のこと。連綿二四代の続いた大掾氏も、左近太夫淨幹の代に至り、武運拙く、佐竹義宣の軍勢に討ち滅ぼされたのであった。

淨幹このとき一八歳。

色男金と力はなかりけれ。

淨幹これに違わず武運拙しけれどその男ぶりは見事に美形であったといふ。その奥方鈴姫は、園部城主河内守の息女にて、これもまた近郷まれなる美貌の持ち主。歳も一六歳。まさに淨幹、鈴姫はこれ以上にない似合いのカップルであったと伝えられております。

当時、近隣諸国に絶大の力を誇った佐竹義宣は智にも長、府中城攻略を企てると、先ずは園部城を攻め落とし、その軍勢をもって交戦を仕掛けたのでした。よもや岳父の軍勢に攻め立てられようとは、淨幹の無念遣るかたなく、鈴姫の悲嘆も言語に尽くせぬものであった。

長期にわたる名門というぬるま湯に育った淨幹にあれば、戦の策謀の拙く、刻一刻に砂塵を蹴って馳せ参ずる注進は何れも見方の敗戦。策謀の拙き者の堪えの緒も緩く、もはやこれまでと早々に観念の固め、館に自らの手をもって火を放ったのである。

炎々と燃えさかる紅蓮の炎は天を焦がし、夢破られた夜鴉の群れの炎の中に乱舞する様はおどろおどろしく、淨幹の乱心、狂気を起すと、炎の中鈴姫に迫り、「園部は昨日の見方今日の敵。そなたも今は我妻にあらず。思ひ知れ」と手にした刀で片目突き刺すと燃えさかる炎の中に身を投じたのであった。

片目を殺された鈴姫は、焼け落ちる棟木の火明かりに身悶えの姿を照らし、怨念の持って城中の池へとその身を投じたのであった。

それから後、この池に棲む魚は鈴姫の恨みによって何れも片目であったと言ひ伝えられています。

しかし、これは後の世の者の鈴姫を美化して語り伝えられましたる表の話。影に伝えられます裏物語とはまさに奇奇怪怪。表裏何れに真実のあるかは不問。なれど秘される影にも光の当てて、情報の開示は今の世のならば。たわけたことと一笑或いは非難、お叱りは覚悟のことに、小耳大耳に挟みましたる影の掘り起こして曝すも伝承。

講釈師、見てきたような嘘をいい。

こういわれてしまいますと身も蓋もございませませんが、何も全くの嘘を申し上げているわけではございません。ものの道理や事の真実を分りやすく

説き伝えるために、あたかも見てきたような臨場感を持って講釈のたれるが講釈師の役目。多少の創造的誇張はお客様へのサービス追及の結果のこと。決して嘘偽りの平氣に語るものではございません。

眉唾ものの講釈師などとの先入観のお捨てくださいますので、初めての影の真実語り。おどろおどろしきも心しましてのご清聴の程お願い申し上げます。次第でございます。

浄幹の美男ぶりは伝説に違わぬものであったそうですが、鈴姫の近郷まれに見る美貌の持ち主とは影の説によりますと真つ赤な作り事であったそうで、楚々なる声にはあまりに似つかず、筆舌に表わすを憚るほどの醜女であったといえます。

知将の誉れ高き園部城主河内守は、生まれながらに大層な醜女であった息女鈴姫の末を深く案じ、幼少の頃より人目を遠く避けた箱入りにて育てたそうにございます。そのため誰いともなく絶世の美女なる風評の流れたといえます。

鈴姫十の二、三になりまして、風評の聞き、近隣諸国よりあまた持ち込まれる縁談話の河内守ことごとく拒むに及んで、絶世の美女なる風評の益々に高まったのだそうでございます。

戦乱の世には隣国との不可侵条約としての政略結婚は当たり前のこと。政略結婚に風流の思考などはもつてのほかではありませんが、それはそれ、いかな政略結婚にあれ美人に過ぎたるの拙きことあるはずもございません。ましてや誉れ高き知将の息女とあれば誰も彼も見逃すはずのありません。

しかし、河内守は首の縦に一寸たりも振ることはなかったといひます。かくして戦国になり響いた知将のこれほどまでに愛で、拒むは余程にめでたき美形の姫君に違ひない、と更にいつそうの風評の大きく広まり渡つたのでございます。

左近太夫淨幹の武運の拙しきに国の末を案じた側近の中に、鈴姫の実は大層な醜女であることを探りあてた者がおりまして、知将河内守の鈴姫への心痛を手玉に、醜男に美女、醜女に美男こそ家内の平安と古来より申すと、チクリチクリと鈴姫の真実の世に流さんと暗に迫りて、押しの一にとうとう首を縦に振らせたそうにございます。そして、淨幹には世継ぎへの腹借りは逞しきが先ず。普段には美人の側女に愉しむが武将の風流などとたわけた説得をもってまんまと婚儀・縁戚の結びを固めたのでした。

しかし、時は戦乱のこと、知将河内守も時の佐竹の勢いには勝てず、あつけなく落城となり、園部の軍勢は佐竹の府中城攻略の先兵として投入されたのでした。

情勢の不利に堪えのもてない淨幹、攻め入る園部軍に早々と観念の固め、自ら城に火を放つと、「役立たずの醜女めが」と逆の恨みして、手にした刃を鈴姫の目に突き刺し、唾の吐きかけて火炎に飛び込み果てたのでした。

片目の殺された鈴姫は、幼少よりの付きの女中に助けられ火炎をさけて城中の池に逃れて一命の取り留めたのでございます。

火炎のようように収まった早朝、静まり返った鏡の池の中に立った鈴姫、

水面に映った己が顔を生きた片目に見たとき、片目の死んで顔の炎に焼け爛れしおどろおどろの様に氣のふれ、狂氣の呼んでかたわらに氣絶する付きの女中の静なる顔に嫉妬すると、懐劍の鞘はらい、その目に突き通し命をも絶ち消してしまったのでした。

狂氣した鈴姫は、内掛けを脱ぎ捨て何処とも知れず姿の隠したのでした。ようように陽がのぼり、城中の池に内掛けに隠されて浮かぶ女中をみたるの、それがてつきり鈴姫と思い、懇ろに葬ったのだそうにございます。

その後しばらくして池の魚たちに異変が起きたのでした。水面に口をパクリパクリと空喰いのする魚たちの片目がみな潰れ、赤く腫れているのでした。それを見た者達は鈴姫のたたりと口々に叫び、二度と近づくことはしなかったといひます。

ある新月の晩のことであつた。鈴姫のたたりを恐れて人の通うことのないなつた城中の池の端を一人の乞食坊主が通りかかった。

ふと見ると池の中に怪しげな人影。

半裸の状態の女が頭に蠟燭の火をくくりつけ、水面をかざしてざるで何やらしきりにすくっている様子。何をしているかと乞食坊主が近づいてみると、顔面の焼け爛れ片目のえぐられたおどろしき形相の女が、蠟燭の灯りに寄り来る魚をすくい、手に取ると臉の落ちぬ片目にかざし見ながら、魚の片目を針で突き刺し、

「鈴姫の恨みじゃ。鈴姫の恨みじゃ。父上も淨幹も地獄に落ちりや」と不氣味に喚き声をするのでした。その様は四ツ谷お岩のはるかにおど

ろおどろしき景色であったそうにございます。

「これ女。逆に恨んで非道のならん。わが眼の明かりを殺せ。それで怨念の消し去るがいい」

そう乞食坊主が声をかけると、

「うぬが片目の明かり殺そうと、わが恨み消えぬ。両の明かり殺せば、些かの消えるやも知れぬ。試されるか乞食坊主」

というと、妖気溢れる相貌振り乱し、ジャバ、ジャバ、ジャバジャバジャバと水かき分けて側により、目潰しの針のかざして妖気狂乱の顔傾けてジロリと睨みつけるのでした。

乞食坊主のおどろおどろしき鈴姫の相貌に一寸程にも心揺れず、はだけた白き玉肌の弾む姿の憐れに心動かされ、

「我が両目の明かり死んで、そなたの怨念沈むならくれてやらん」

と目の丸に開いて顔の差し出したのであった。

「我が醜き相貌の見ゆるこの目の憎きぞ」

と叫ぶと、狂女鈴姫は手にした目潰しの針を乞食坊主の両の目にたてたのでした。

城中山の鬱蒼と木立生い茂る中に朽ち果てた廃寺がありました。

夜鴉の不気味に喧しく鳴き叫ぶも人の気味悪がって近づくこともありませんでした。その廃寺に夜になるとかすかな灯りの点り、中から夜鴉の鳴き声に混じって鈴の音の長く尾を引くに似た女の歎の極まり、よがり鳴く声と、極楽じゃ極楽じゃ、という念仏のような声が聞えてきたといいます。

何年か後、旅の僧侶が廃寺に入った時、高貴な緋の内掛けとあせた墨染めの間に白骨の妖しく隠微に重なってあったそうです。

哀れんだ僧侶が経を唱え、懇ろに葬るべく二つの骨を壺に収めるとき、鈴の音の楚々と長く尾を引いて聞えたといいます。

今でも、雲のない新月の夜には池の底から静かなる鈴の音が長く尾を引いて聞えてくるそうです。

鈴姫、女の哀れの裏の物語。真実の果たしてあるやなしや。

おわり